



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 14 号	令和7年	2月	5日
発行人	会 長	西牧	泰彦

東西しらかわ小学校長研究部の活動等について

東西しらかわ小学校長会研究部長 原田 知幸
(矢吹町立善郷小学校長)

研究活動と言えば、子供達の学びを支える重要な柱であることはもちろんですが、校長会の研究はそれと同時に、私達校長自身の学びを支え、途切れさせないこともまた大きな目標です。「リーダーは学び続ける存在でなくてはならない」(言葉で言うのは簡単ですが、実践し続けることはなかなかの挑戦です。)

今年度の研究協議会は、県内各支会ごとの大会でした。各班の委員長を中心に、すべての班が同じテーマで研究を進め、11月の支会大会で班ごとに発表を行いました。指導講演には、鈴木且雪様にあたっていただき、充実した支会大会となりました。皆様の御協力に心より感謝申し上げます。また、次年度の県大会(安達大会)で発表予定の矢吹班へのアドバイスを惜しみなく提供していただいたことにも感謝申し上げます。「県南はひとつ」矢吹班の皆様、私達全員が応援団です。「失敗を恐れず、楽しんで！」準備をお進めください。

福島県小学校長会は令和7年度から9年度にかけて、まさに節目を迎えます。令和7年には100周年を迎え、8月の県大会(安達大会)において記念式典と祝賀会が開催される予定です。校長会の歴史を振り返りつつ、未来を見据える貴重な機会になるものと期待しています。さらに令和9年10月には郡山市ビッグパレットふくしまをメイン会場に、参加者2,600人規模の全国大会

・東北大会が開催されます。

この一大事業に向けて、既に準備が始まっています。例えば、令和8年・9年度版の研究の手引きについては、これまでの10分科会から13分科会26視点へと範囲を広げて検討が進んでいます。「経営ビジョン」「リーダー育成」「社会形成力」が新たに追加)また、令和7年度の安達大会でも、全国大会を見据えた運営が計画されています。グループ協議の内容を共有化するために、意見や感想や協議内容をフォームに送信し、テキストマイニングにしてスクリーン投影するなどの改善が図られます。

福島県の校長は、研究推進と大会運営の二刀流に挑むこととなります。この挑戦、困難であることには間違いありませんが、「困難は成長のチャンス」であり、「100年・47年に1度の巡り合いに立ち会える」というレアな体験談のネタにもなります。

「ふるさとに誇りをもち、多様な他者と協働しながら持続可能な社会を創造していく子どもを育てる学校経営の推進」これは現段階での福島大会の研究副主題案です。その設定理由には、『現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である変動性(Volatility)、不確実性(Uncertainty)、複雑性(Complexity)、曖昧性(Ambiguity)その頭文字5文字をとって「VUCAの時代」とも言われている。社会の持続的な発展を生み出すのは「人」の力であり、教育の果たす役割は重要である。(一部抜粋)』と記されています。この時代に必要な力は、変化に適応する柔軟性や新たな価値を創造する創造性、多様な価値観を理解し協力し合う共生力、実践的な課題解決力、コミュニケーション能力等があげられています。子供達がこの時代をたくましく生き抜いていくためには、これらの力を身に付けていく必要があります。県校長会では、校長の研究(学び)が子供達の生きる力の育成に還元されるものとして、校長会研究協議会を重要な位置づけとしています。

最後になりますが、今年1年の研究部の取組みへの御協力にあらためて感謝申し上げます。校長会の研究活動が日々の学校運営や教育実践に幅と深みをもたらし、子供達の成長に結びついていくものと信じています。さらに次年度以降もどうぞよろしくお願いいたします。

マージナル・ゲイン(パート2)

アイデンティティ

白河市立小田川小学校長 渡邊 誠

本会報の発行にあたり、今回、白河西班が本紙面を担当することになりました。私は、3年間、白河西班の研究委員長を務めさせていただきましたので、班を代表して執筆させていただきます。

「教育界に優秀な人材が集まらなくなる。」私が「働き方改革」をしなければならないと考える最大の理由です。「2030問題」をご存じですか。2015年7,728万人いた労働人口(15歳から64歳)が、なんと2030年には6,875万人になる見込みです。マイナス852万人は、なんと東北全体の人口(868万人)とほぼ同程度です。そうなれば、各業界で優秀な人材の取り合いが予想されます。その時、「ブラック」と呼ばれて久しい教育界は、次世代を育てる優秀な人材を確保できるのでしょうか。とはいえ、「まず足元(現状)を見よ。」という声も聞こえてきそうです。このままでは、ますます教職員が疲弊していきます。そうなれば、学習指導要領の理念に代表されるこれからの教育(教育改革)もおぼつかなくなります。これらが、私の考える第2、第3の理由です。

前置きが長くなりましたが、白河西班の研究実践に目を転じてみると、特に、実践事例5「手立ての共通実践と人事評価項目への落とし込み・他の係との連携(E校)」は、学校の課題解決に向けた各種教育活動の改廃・新規立ち上げについて、とても参考になる実践(20時間の削減)だと思えます。白河西班「研究のまとめ・P.9」をご一読くださると幸いです。

本校では、「通知表の見直し(2学期所見なし)」に取り組んで3年目となりました。当時、まずPTA本部役員に意見を伺いました。すると、拍子抜けするほど反対意見はありませんでした。それどころか、「教育相談の内容で所見に代えるというのなら、相談内容を家族で共有することが大切だ。」という建設的な意見まで出されました。

私は、筋を通し意を尽くして説明すれば、保護者は私たちの置かれている現状に理解を示してくださるのではないかと、「ブラック」を逆手に取り追い風にもできるのではないかと思いました。これからも「小さな改善による大きな目標達成(マージナル・ゲイン)」を続けていきます。

白河市立白河第一小学校長 西牧 泰彦

「海のものとも山のものとも分からない…でも何となく面白い感じがする…いろいろやってみるといい…」これは、初任校でお仕えした校長先生が、ご自身の退職時に、私に贈ってくださった言葉です。私は、その後の教員人生の節目節目でこの言葉を思い出しては、原点に立ち返り、次の一歩を踏み出す時の心の糧にしてきました。

生まれは山形県の米沢ですが、生後10ヶ月から社会人になるまで、父親の仕事の関係で、ほぼ2年に一度、東北各地を転々としてきました。中学も高校も、そして大学も福島ではなく、右も左も分からず飛び込んだ教員の世界。まして住まいは鏡石である私が、ご縁をいただいてここ県南の地で役職定年を迎えることになりました。

振り返ってみれば、初任校はもとより、私の教職経験年数の2/3が県南の学校での勤務となりました。担任をした、しないに関係なく教員として子どもの可能性を信じることの大切さを教えてくれた子ども達の存在、保護者の方々からの温かい励ましの言葉、そして、共に働いた教職員の仲間達との日々。県南での一つ一つの出会いが、今の私を形作ってくださったと言っても過言ではありません。困難に直面した時や辛い思いをした時に、必ずと言っていいほど、誰かが手を差し伸べてくださいました。同僚の先生方、先輩の先生方、教頭先生や校長先生…多くの方々のご指導・ご助言、そして、温かい励ましとサポートのおかげで、紛いなりにも教員を続けることができました。そして、何と云っても、「一期一会」の連続の中、「どうしたら〇〇先生のような授業になるのだろうか…?」「どうして〇〇学級の子ども達は…」など、私の心を揺さぶり、目の前の子どもの姿と力を通して、先輩の先生方が示してくださった数々の教育実践は、今も憧れとして目に焼き付いており、教員として学び続けること、理想を追い求めることの大切さを教えてくれています。

「地元はどこなの…?」長らくこの問いの答えに迷ったり、窮したりすることが多かった私ですが、この度の役職定年を機に、「県南です」と言えるように、最後までしっかりと職責を果たしていきたいと思えます。

自分のペースでよい

白河市立白河第二小学校長 稲川 竜寿

宿泊学習で茶臼岳に登ってきました。一行は山岳会と保護者ボランティアを合わせ総勢約130名、登山道を振り返るとまるで大キャラバン隊です。大半の子がはじめての登山で、「あんなに高いところまで登れるのか。無理でしょう。」という不安と自信のなさを抱えたまま登り始めました。

そもそも、なぜ小学校で登山をするのでしょうか。天候の急変やガレ場での転倒、熱中症、雨天時の屋内メニューの準備など、校長としての心配事は少なくありません。そんな中でも実施するのは、屋内に閉じこもりがちな今の子たちに雄大な山の景色や可憐な草花、小鳥のさえずりなどの「自然のすばらしさ」を感じさせたい。すれ違う登山者同士が「あいさつを交わす良さ」に気づかせたい。「自分のペースで一步ずつ足を運べば、誰でも必ず山の頂に立つことができる」ということをすべての子に体感させたい。という思いがあるからです。日常、子どもたちは他と比べられることの多い社会の中で生きています。勉強や運動で順位や平均を上回ることを、他の人よりも上になることを求められ、大人に急き立てられるようにして頑張っています。その中でどんどん成長する子もいれば、反対に自信を失い自己肯定感が下がる子もいます。他と比較するから自分の良さを見失うのかも知れません。

当日は、午後の天候に少し不安があったため、昼食は山頂ではなく少し降りた峰の茶屋付近でとりました。しばらくして、最後の子が降りてきました。体格の良い子で、班から大きく遅れて山岳会の人と一緒に降りてきました。その子に「どうだ。一步一步あるいたら、きちんと頂上に立てただろう。」と声をかけると、笑顔で大きく頷き、両手に持ったおにぎりにおいしそうにかぶりついていました。きっとこの日の登山はこの子の自信になったはずです。

どんなことでもそれぞれが前を向いて自分のペースで努力すればいい。他の人から遅れても必ず成長します。前さえ向いて歩みを止めなければ、いつかは目標にたどり着けることを教えてあげたいものです。

笑顔がつくるものは

白河市立みさか小学校長 小川 洋太郎

「笑顔がつくるものは・・・期待、楽しさ、そして安心感」

この言葉は、私が園長兼務で幼稚園教育に携わった時期に出会った言葉です。そして、校長として年度当初の職員会議資料に毎年掲載してきた言葉でもあります。

幼稚園教育においては、環境構成をととても大事にしており、幼稚園の先生方は子どもの発達課題や保育内容を踏まえて、日々、環境構成を工夫しています。その中で、常に変わらない重要な環境構成のひとつが“環境としての教師”です。園長として初めて参加した研修会において、講師の方がそのことを新採用の先生方に伝えるために用いたのが、この「笑顔がつくるものは・・・期待、楽しさ、そして安心感」という言葉でした。

私の新採用は児童数が千人を超える大規模校でした。出勤時にいつもお世話になっていた事務の先生から「洋ちゃん今日も不機嫌だよ」「洋ちゃん嫌なことあった?」「洋ちゃん怒ってる?」「笑顔!笑顔!」と声をかけられていました。そのときの反省からか、研修会で出会った言葉は、まるで当時の自分に投げかけられた言葉のようにも感じました。そして、担任時代、“朝、教室で子どもたちを迎えるとき”“授業を始めるとき”、自分はどんな表情で子どもたちの前に立っていたのだろうかと考えさせられたのを憶えています。

このとき、私は2年間、園長を兼務しました。業務量的には大変であったと記憶していますが、学びの芽生えや自己発揮のための援助等、幼稚園教育から学ぶことも多くありました。そして、何より園児とかかわる中で、笑顔の大切さについて改めて教えられました。校長としても、学校は子どもたちにとって楽しい場所であり、安心できる場所であり、成長が期待できる場所でありたいという思いをより強くした時期でもありました。

“教師は子どもたちにとっていちばん大切な教育環境”とよく言われます。また、子どもたちにとって教師は“理解者であり、援助者であり、憧れである”とも言われます。一人の教師として、校長として反省すべきことばかりでしたが、残された時間、笑顔で子どもたちの前に立てる教師でありたいと思っています。

校長としての社会貢献

西郷村立羽太小学校長 大倉 幸子

テレビに映る成人のインタビューを見て思った。どの成人も、「世の中の役に立つ人間になりたい。」と言っている。やっぱり子供は、家庭だけのものでもなく、もちろん学校のものでもなく、地域社会の宝物だ。その子供達に対し、教育課程という意図的手段により、その宝物の成長に携わることができる我々教師は、その仕事をする中で「世の中の役に立っている」・・・はずだ。

現任校はコミュニティ・スクールとなり4年目を迎える。今年もコミュニティ・スクールを運営する柱として、『防災教育』を取り上げてきた。

8月には地域の方の案内で、平成10年の8・27水害で泥水に浸った場所や、平成23年の東日本大震災でマンホールが飛び出した場所を、フィールドワークの形で巡った。

11月、児童は勉強道具ではなく、自分で考え揃えた「防災・避難グッズ」を背負い登校した。昼食は赤十字奉仕団の方々にご協力いただき、炊き出し体験を行った。

来る3月11日には昨年に引き続き、避難所設営訓練を行う予定。地域の方にも大いに参加していただく。現任校は少人数小規模校ゆえ、自分と年齢が異なる地域の方々に接する機会が多い。これは大きな強みでもある。

このように、地域を巻き込んだ『防災教育』。将来子供達の身に災害が降りかからないという保証はない。あるいは、被災した人の立場になって考え行動できることも、人として大事な資質・能力であると考え。また、羽太コミュニティ・スクールの理念として『目指すは未来の羽太』とうたっているとおり、地域を未来につなげるためには、命を守り、安心・安全が保証できる『防災』が大前提となる。災害に強い羽太地域、自助・共助ができる羽太の子供を育て、ふるさと羽太の資源(人・自然・伝統・産業)を未来につなげていきたい。

結びに、校内外の教育環境整備と教育内容の実施に尽力してくださった教頭先生はじめ本校の教職員のメンバー、何かと相談にのっていただいた校長会の皆様、そして関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。お世話になりました。

憧憬、そしてモデリング

棚倉町立棚倉小学校長 藤田 篤

教員人生を振り返ると、誰しもあるように自分の見方・考え方、そして教員としての生き方に大きく影響した「出来事」「環境」「人」との出会いが脳裏に浮かんでくる。

昭和62年4月、新採用として福島第四小学校に着任し、その年から、初任者研修試行制度がスタートした。大分や沖縄への洋上研修など、今思えばバブルの恩恵を受けることもあった。初任者研究授業24回はとてもキツかったが、授業づくりの大切さを教えていただいた。2年目以降は、スポーツ少年団の指導にも力が入った。保護者や地域との連携を実感し始めたのはこの頃である。そんな20代を過ごし、30代になると、私にとって「憧憬」とも言える大きな二つのモデリング体験に出会った。

一つ目は、筑波大学附属小学校の国語科S先生である。それまで、国語科のモヤモヤしていた指導に新たな着眼点が加わった。ようやく、「授業は『楽しく、転移する力をつけるもの』である」ことが理解できるようになった。

二つ目は、30代後半で出会ったF校長先生である。私たちに「本質」とは何か、常に問いかけ、その言葉一つ一つに重みがあった。管理職になった時いただいた言葉「管理には、『抑制』と『促進』の両面がある。『抑制』の管理ではなく、『促進』の管理を心得よ。」を今も大切にしている。

今、本校では「肯定的・対話的なかわり」「学びをつなぐ」「価値付け、つなぎ、語らせる」ことを大切にしている。キャリア教育というと、何か抵抗を感じる教員も多いが、楽しいと思える「心理的安全性」を確保し、学びを「負の連鎖」ではなく「正の連鎖」へつなげたり、学びの「意味や価値」を考えたりすることは、教育の「本質」そのものではないだろうか。私は、今整った環境の中にいるが、土台作りから奔走した前々校長や前校長に敬意を表したい。節目と言え頃、さまざま「出来事」「環境」「人」との出会いが自分を変えさせるきっかけになっている。時には、学校現場から離れることもあった。教え子が教員や保護者となり支えてくれることもあった。出会った新たな環境、出会った全ての人に感謝したい。